手紙と漂流詩

[Drifting-poetry]
Correspondences and Hyōryūshi

詩人、展覧会のオーガナイザー、美術批評家、造形作家と多様な活動を繰り広げた瀧口修造（1903–1979）は、様々な人物から多くの物品をおくられているが、手紙もその一つである。現在残っているその数は、およそ3,500件（慶應義塾大学アート・センター所管分）と膨大である。手紙はそれがどんなに素っ気なくていも、またどんなに紙葉を重ねていても、遠くにいる誰かに様々な想いを馳せて書かれるものだ。それは、瀧口の語る「漂流詩」とよく似ている。

本展では荒川修作／マドリン・ギンズから瀧口のもとへと届いた手紙*のような諸作品を対象とする。

例えば、1974年、エディシオン・エパーヴによって《漂流物標本函》という9つの小部屋を持つ箱型のオブジェが制作された。複数の作家が各々の小部屋に漂流物としてのオブジェを収めた作品である。参加作家の中には瀧口、および荒川／ギンズらがいた。そこで荒川／ギンズは30枚の古写真に手を加えて別の何かへと変成させている。

そして、これらは瀧口へと荒川／ギンズが送った手紙ともよく似ている。これらをオブジェとして見るだけでなく、手紙またはその同封物として見たときに現れる別の表現について考える。

《漂流物標本函》
富山県美術館所蔵

* 本展は瀧口修造資料を分有する富山県美術館と慶應義塾大学アート・センター（以下KUAC）による共同企画展である。富山県美術館（瀧口修造コレクション室）にて行われるとともに、以下、慶應義塾大学で行われるシンポジウム（2024年12月）、KUACで行われるアート・アーカイヴ資料展 XXVII「交信詩あるいは書簡と触発：瀧口修造と荒川修作／マドリン・ギンズ」（2025年3月–5月）と「手紙」というテーマを共有している。

現在、KUAC、荒川修作＋マドリン・ギンズ東京事務所、Reversible Destiny Foundationは瀧口と荒川／ギンズが互いに送りあった書簡整理を共同で進めており、本展示はその整理を背景に企画された。

2024年11月7日–2025年2月11日 | 富山県美術館展示室6

主催：富山県美術館、慶應義塾大学アート・センター
協力：荒川修作＋マドリン・ギンズ東京事務所、Reversible Destiny Foundation

開館時間：9:30–18:00（入館は17:30まで）
休館日：毎週水曜日、2024年12月29日–2025年1月3, 14日
観覧料：コレクション展観覧料が必要です。一般300円（240円）
* ( ) 内は20人以上の団体料金
* 70才以上と大学生以下の方はコレクション展観覧料無料
* 企画展観覧券で入場当日に限りコレクション展も観覧可能